

## ユダヤ議会の前でのパウロの弁明

使徒言行録 21 章から 28 章までの 9 章はパウロの宣教の働きの最後の段階の記録である。一連の出来事が起る。パウロのエルサレム到着と神殿での逮捕 (21 章) 群衆に対するパウロの弁明 (22 章) ユダヤ議会の前でのパウロの弁明 (23 章) ローマ総督フェリクスの法廷での弁明 (24 章) ユダヤのアグリッパ王の前での弁明 (25, 26 章) そして最後にローマへ送られる (27, 28 章)。

彼は三回にわたる大伝道旅行を敢行し、その結果、小アジアの各地、マケドニア、ギリシャの各地にもキリスト教会、神の教会が出来た。そして、今彼はエルサレムに戻って来た。しかし、ここで彼は、ユダヤ民族主義者によって、逮捕される。そして、彼はローマ軍の手に渡され、今や鎖でつながれる身となった。

彼の働きはこれで終わったのか？ 挫折したのか？ そうではなかった！ 逮捕という出来事もまた、神は支配していたのであり、逮捕、裁判という一連の出来事を通して、実は思いがけないことが起った。すなわち、通常の方法では、到底福音が届くことがなかったであろう所にまで福音が入って行き通常の方法では、福音を聞くことができなかつたであろう人々、即ちローマの軍人、総督、議会、王たちや高官たちにまで、福音が伝えられるということが起ったのである。

第 23 章は最高法院の前でのパウロの弁明である。ユダヤの最高権力者の集団である。そこには大祭司や祭司長、議員たちが威風を整えて座している。その彼らの前で、パウロは堂々と福音の証しをする。そこには、何物をも恐れぬ、神の僕としてのパウロの毅然たる姿がある。

こうして使徒パウロの身はローマ軍の手に渡された。これを機にパウロの人生は大きく変わり、ローマ軍の捕囚としての受難が始まる。ユダヤ教当局者による度重なる死刑要求と、熱狂的民族主義者の暗殺団による暗殺の危険にさらされながら、彼の身は、エルサレムからカイサリアに移され、さらに帝国の首都ローマへと移されて行く。

しかし福音は決してつながれてはいなかった。これまでは、何百マイルも何千マイルも歩いて伝道して来た。これからは牢獄が、伝道の場所になる。法廷が、伝道の場所になる。エルサレムにおいて、カイサリアにおいて、そしてローマにおいて、裁判が繰り返される。その度重なる裁判の席上、ユダヤ人のみならず、異邦人の高官たちや王たち、役人や兵士たちに彼はキリストの福音を力強く伝える器と変って行く。こうしてローマの宮殿奥深く福音が浸透して行くことになる。

神の為さる業は何と不思議なことか。その御心は何と深いことか。人間の思いをはるかに超えている。この、神の不思議な御業、時と状況を支配される、歴史を支配される神の不思議な摂理、それが、使徒言行録で描かれ、教えられている真理である。 今日もまた、神は不思議な方法で、私たちを用いて、福音のみ業を人々の間で、或いは人々に対して、行なうお方であることを覚えてほしい。健やかな時もそうであるが、病める時も、順境の時も思いがけない逆境と見える状況でさえもまた神は支配しておられ、ご自身の栄光を現す機会として用いてくださるのである。このことを悟ることはキリスト者にとって大切であり、また慰めの励ましの根拠でもある。